

目 的

周年に亘って高水温である事その他、水質が汚染されていないために生物の培養、特に幼稚魚の飼育に有利な条件を備えている南方亜熱帯海域の特性を最大限に活用して、南方諸島へ有用海産魚の早期種苗生産基地を確立し、併せて、その種苗を活用することによって本土における海産魚類養殖の効率化を図る。

本土における魚類養殖の現状と早期種苗に対する需要

- (1) 年間の生産量12万トンのうち、その92%を占めるハマチ（ブリ）が近年過剰生産気味で価格は伸び悩んでおり、新魚種移行（養殖対象種の拡大）への志向が強い。
- (2) 単価の高い事、赤潮その他の環境悪化に対して強い事等からポストハマチとして登場したマダイは1kgに養成するためには3ヶ年の年月を要し、資金の回転率が低い。
- (3) マダイが商品となるためには、最低200gが必要であり（現在では年内30～120g）もし、年内200gにまで養成可能な早期種苗があれば、それへの期待と需要は極めて大きい。
- (4) 農林統計によると年間の養殖用マダイ種苗需要量は約2千万尾であり、そのうち約700万尾が人工生産種苗で残り1,300万尾は天然種苗に依存している。
- (5) 聞き取り実態調査によると昭和55年度におけるマダイの種苗価格は全長7～8cmのもので80～100円とされたが、早期種苗は120～140円で全量が売れ、晩期種苗は60～80円で尚売れ残ったというのが実情である。このため、種苗生産業者は採卵、飼育、餌料培養等全般に亘って加温している。

昭和55年度はミナミクロダイを中心に種苗生産、中間育成、種苗輸送等について試験を実施した。今年度はマダイ幼魚を広島県から移殖し、その成長試験、マダイ親魚輸送試験、ミナミクロダイ及びマダイの中間育成試験、そして県内で多獲され大型の魚種であるマダラハタを新しくとりあげ、その親魚養成、産卵等について試験を実施したのでここに報告する。

本研究を進めるにあたり懇切な御指導をいただいた南西海区水産研究所増殖部、岡本亮室長に厚く御礼申し上げます。

担 当 者

多和田 真 周（研究員）
藤 本 裕（ ” ）
大 城 信 弘（ ” ）
新 垣 盛 敬（支場長）

助 言 指 導 者

岡 本 亮

（水産庁・南西海区水産研究所）